三十路処女アネカノ

女教師妊娠出産

三十路処女アネカノ女教師妊娠出産

弾

同人サークルぶるずあい

表紙・挿絵　藍川ナンデス

目次

プロローグ　美琴はお姉ちゃん　7
三十路処女オナニー　17
あとがき　27

プロローグ　美琴はお姉ちゃん

母が死んだとき弘樹は何も考えられなかった。茫然自失とはまさにこのことで、心に闇の帳が下りてそこにはもう光が差さないように思えた。小学二年生八歳の夏だった。

母は優しい人だった。溢れんばかりの愛情を弘樹に注ぎ、彼もまた母が大好きだった。

まだ三十代の若さだったが癌が見つかり余命を宣告されてから、あっという間に旅立った。

弘樹は母がいつもいたキッチンでひたすらまどろんでいた。

そうしていればまたいつもの様に母がまな板を叩く音が聞こえてくるんじゃないかというように。

昼の日差しが窓から差し込んでいたが、電灯の明かりのないキッチンは薄暗かった。

弘樹の状態を見た父は彼をそっとしておいた。ちょうど夏休みであったし、悲しみを癒す方法が見つからなかったのもある。

何よりその父も弘樹と負けず劣らず悲しかったのだ。

ふと、玄関のチャイムが鳴った。チャイムを鳴らすという事は父ではない。きっと神崎のおばさんだろうと弘樹は思った。

神崎のおばさんは父と母の大親友で世代は一回り上で四十代、二十歳になる美琴という娘が

いた。
弘樹はチャイムが鳴っても無視をした。母でなければ誰が来ようとも同じだった。
玄関の方で音がした。そういえば鍵をかけていなかったような気がする。
誰かが入ってきた。こちらに近づいてくる。
「弘君……いる？」
鈴が鳴る様な美声だ。見ると二十歳の女子大生美琴だった。
「あ……美琴さん？」
何をしに来たんだろう、と弘樹は思った。
母が生きていたころの弘樹は利発な子で、美琴や神崎のおばさんが来れば、手づから茶を振舞って、母に褒められ鼻を高くしていたものだった。
「弘君……」
美琴が弘樹を抱きしめた。甘い花の様な香りが幼い鼻孔をくすぐった。それはどこか母を思い起こさせ、またツンと鼻の奥が痛くなり涙がにじんだ。
「ママ……」
そこでまた弘樹はぐったりと項垂れる。
「大丈夫よ弘君。美琴がお姉ちゃんになってあげる」
「お姉ちゃん？」

「うん……再婚よ。本当の家族になるの」
（本当の……家族？）
次の瞬間わっと涙がでて弘樹は、母親が死んでから初めて声を上げて泣いた
美琴が姉になるという驚きと共に、本当に母が死んだんだと実感できたから。
だから、赤ん坊に返ったように弘樹は泣いた。

☆

「美琴先生が姉さんってマジで羨ましいよ」
「でも結構厳しいんだ。成績が落ちると雷もんだよ」
美琴は大学卒業後教師となった。今現在は弘樹の通う高校の教師となっている。
地方都市だが地元ではなかなかの進学校だ。
あれから十年経った。十八才の受験生となった弘樹は立派に成長していた。まだどこかあどけなさを残す顔はまずまず可愛らしい。決して美形ではないがどこか女性の母性をくすぐる容貌をしていた。
授業開始前の休み時間で教室の生徒たちはガヤガヤと談笑にふけっている。男子生徒は学ランで女子はセーラー服。夏の日差しで教室内は明るく、進学校の受験生にしては殺伐とした感

じはしなかった。
やがてチャイムがなり生徒達は自分の席に着いていく、そこへ美琴がやってきた。
その姿は三十路の色気を十二分に放っていた。成熟した女性でありながら、まだまだ年若い娘のようであり、まさに女盛りだ。
肩まで伸びるセミロングの髪はキューティクルが光を弾き、美貌は化粧などなくても白く、微かな頬のチークは桜を思わせた。
豊満すぎるほどの胸の果実はメロンのようで、蜂腰と呼ばれるようなくびれたウエストは本人の意思とは裏腹に悩ましく男子生徒を魅了していた。
ビジネススーツをパリッと着こなしていて、同性から見てさえも美琴はとてもカッコよかった。またスカートから僅かに覗く太ももには根強いファンがいる。
「それでは授業を始めます」
美琴が教壇に立つ頃には、生徒達は黙ってじっと黒板を見つめていた。
「あのオッパイたまんねえ」
弘樹のすぐ後ろの生徒がニヤニヤしながら弘樹を突っつき言った。
「弘樹君！　何をしているの」
弘樹は何も悪くないのだが、思わず後ろを振り返ったため、その姿を美琴に見咎められた。
「もう授業は始まっていますよ」

「すっすいません……」
「たるんでいますね。教科書のこの問題解いてみなさい」
「あの……えっと……解りません」
美琴の眉間に小さなしわがより、眉の外側がつり上がった。怒った顔も悩ましい。
そして、弘樹はこの日こってりと美琴に絞られたのだった。

「いやぁ……悪かったよ」
授業が終わったあと後ろの生徒が謝った。
「いいよ。ねえさ……美琴先生は最近機嫌が悪いんだ」
美琴は弘樹がまだ進路を決めていないことにヤキモキしていた。
先生らしく弘樹を特別扱いはしていない美琴だったが、肉親なりにやっぱり弘樹のことを気にかけていた。
「なぜに機嫌が？」
「まあ僕の進路についてだと思う」
「お前進路は決まったって言ってなかった？」
訝しむような表情で彼は言った。
「うん……まあ自分の中では」

とぼけたように弘樹が答える。
「まさか世界一周して見てくるとかじゃないよな」
「まさか……」
だよな、と言って二人で笑った。
（なかなかあんなこと姉さんには言えないよな）

☆

（怪しい……絶対怪しいわ）
美琴は自分の部屋の中で落ち着かない犬の様にくるくると歩き回った。
時刻は午後六時、弘樹はまだ受験対策の補習授業を受けていた。
定時でさっと帰った美琴には目的があった。
（調べるには今しかないわ）
美琴は弘樹の部屋を家捜しするつもりだった。
最近は妙に態度がよそよそしく、進路の話になると特にしどろもどろになる。
何かを隠してると美琴は確信していた。
（鍵はかかってないわね）

弘樹の部屋を開けると、年頃の男の子のトニックウォーターの様なスメルが微かに香った。
部屋は整理整頓ができていた。きちんと休みには掃除をしているようであり、床も本棚やベッドの上にも埃やゴミはない。
本棚には文芸部に所属しているだけあって、漱石や芥川、川端康成なんかに交じっていくつかライトノベル等が並んでいた。
学習机もしっかりと使われながらもきちんと整頓が行き届いていた。
まず、美琴は学習机の引き出しを開けてみた。
怪しいところはない。
次いで、本棚をざっと見る。
やはり、怪しいところはない。
（まさかこんなベタなところには隠さないわよね）
美琴はベッドの下を探ってみた。すると何かがカツンと手に当たった。
（あった……）
エッチな本かとも思ったが、よく見ればそれは大学のパンフレットだった。
（なにこれ？　東京の？）
手に取ったパンフレットはどれも都内の大学のものだった。
（あの子家を出るつもり？）

ふつふつと美琴の胸に怒りが湧きおこっていく。
この辺りにだって良い大学はいくらでもあるのだ。それをわざわざ家を出て東京に行くという事が美琴には信じられなかった。
（弘君には美琴が付いてなきゃ駄目なのに）
美琴はブツブツと不満をつぶやきながら、さらにベッドの下を探る。
すると、今度はなにかすべすべしたものが手に当たった。引っ張り出してみて美琴は驚愕した。
「なにこれっ！　パンティ？」
それは紛れもなく女性物の下着だった。シルクのレースをあしらった白い下着。
「しかもこれ美琴のじゃない？」
思わず大声を出して驚いてしまう。
弘樹は何にパンティを使ったのだろうか、そんなものは解りきっている恐らくオナニーに使ったのだ。
（弘君……これってやっぱり美琴を異性として意識してるのかしら）
そう思うと嫌悪感よりむしろ高揚感の方が高まった。
（クロッチのところが少し汚れてる……脱ぎたてを盗んだのね）
東京の学校のパンフレットにパンティ、これだけの証拠が揃えば美琴にとっては十分だった。

（待ってなさい弘君……問い詰めてあげるから）

三十路処女オナニー

自室で弘樹を待つ間、美琴はソワソワと落ち着かなかった。
（弘君……私をオナペットにしてたんだ）
どんな妄想が繰り広げられたのだろう。パンティは舐めたりしゃぶったりしたのだろうか？
他の男なら嫌悪感しか湧かないだろうが、相手が弘樹なら話は全く違う、彼が自分を性の対象として見てくれていることがたまらなく嬉しい。
すると、どうも子宮はキュンキュン、膣はムズムズと落ち着かない。排卵日より少し早いのにもう卵巣が張った様な鈍痛がする。
（なんだか排卵しそう……エッチな気分……なのかな？）
美琴はベビードール姿だったが、悶々とした気分に思わずオナニーを始めてしまった。ベッドに仰向けになり膝を立て脚を開く。
左手でそっと胸を揉んでみると微かに芯のある乳房、その先端にある蕾は硬くしこり、豊乳に指を沈めていくごとに泡立つように快感が広がる。
いつもはやんわりふわふわな乳房も今は張っていて、毬のような弾力を返してくる。
「あっ……あぁぁぁ……」
思わず唇から漏れる嗚咽。甘い香りのする吐息が止まらない。

じゅわっと膣にお湯が差す様な感覚が股間を走る。僅かずつだが蜜壺は濡れ始めていた。生娘は何とも言えない疼痛感を感じ太ももをすり合わせた。

左手で乳房を、右手で秘唇を覆うように、まずはゆっくりと揉みしだく。クロッチに湿り気が広がり、押さえつけられた若草がもしゃもしゃと音を起てる。

乳首をつねりながら乳房に深く指を沈める。

「はぁぁ……嫌だ。いつもより感じちゃう」

美琴は弘樹を異性として強く意識していた。もっともっと若い時から、いつかその童貞を奪うことを夢見ていたのだ。姉弟だと言っても血がつながっているわけでもない。

背徳感、それはあったが、そんなもの弘樹の愛らしい顔をみれば吹き飛んでしまう。

実は弘樹の交友関係は常に厳しくチェックしていた。今のところ弘樹には彼女の様なものはいない。今までいたことも無いので美琴は彼を童貞だと確信していた。

「はぁ……はぁ……んっ……」

膣にいきなり指は入れたりはせず、まずは手のひらで秘唇全体を圧迫する。鈍く甘い快感が下半身全体から湧き起こる。

本来美琴はそんなハードなオナニーはしない。大体秘唇を軽く撫でまわし、締めはクリトリスを軽く転がすだけだ。

しかし、オナニーの回数は決して少なくはない。一つ屋根の下に暮らす弘樹をオカズに二日

に一度くらいはする。
特に排卵前と生理前は深くじっくりと自慰の世界に潜り込む。三十路になった体が強く男を求めていた。
「あぁぁぁ……切ない」
股間と胸を揉んでいると膣が妙に寂しい。膣が肉棒を求めてヒクヒクと蠢く。普段ほとんど指を入れたりしない美琴は、膣オナニーがどんな感じかよく知らなかった。
器具を使ったオナニーにも興味はあったが、処女膜をおもんばかりまだ試したことは無い。
「もう……たまんないよぅ……クリいじらなきゃ」
下着に手を突っ込み敏感な秘芽をそっと転がす。人差し指が捉えた豆はすでにコリコリと勃起していた。小指の先ほどに大きくなった秘芽はパンティを伝わった愛液でほんのり湿り、転がし易くなっている。
「あぁぁぁ……くふぅん……感じちゃう」
甘い快感が走って身震いがする。クリトリスはやっぱり気持ちが良い。
美琴のクリトリスは標準より大きく、度重なるクリトリスオナニーで良く肥大化している。
これを転がすと得も言われぬ甘い刺激で満たされるのだ。
いつもならこれでうんと気持ち良くなって終わりだが。
「やん……中が疼いちゃうよ」

今日は膣が飢えて悶々とした感じが強く募った。
ヴァージンホールはもう蒸れる様に濡れそぼり、しっとりと淫蜜が溢れている。
「うん……どうしよう？」
しばし逡巡した後、美琴は膣に指を入れてみた。
「あぁぁ……凄い濡れてる」
濡れている感じはそれははっきりとしていたが、触ってみるとそこは想像以上に大洪水だった。
中指一本をゆっくりと沈めていく、第二関節辺りまで埋まったところでこつんと障壁に行き当たる。
（ああ……処女膜だ）
真ん中に小指がなんとか通りそうなほどの小さな孔があいている薄膜。美琴の一つ孔処女膜は年齢のわりには厚みがあった。
人差し指をくぐらそうとするとピリリと痛んだ。
「うう……邪魔っけだぁ」
飢えてヒクヒク蠢くのはもっと奥の方なのだがとてもそこまでは届きそうにない。
それでもゆっくりと進むと中指の第一関節がなんとか薄膜を通り抜ける。
「わぁ、凄いわ」

そこは蜜と襞のワンダーランドだった。果汁の様な蜜が薄膜の内側にたまり、膣襞は柔らかくマシュマロの様だ。

ふいに淫蜜の甘い香りと甘酸っぱい処女臭が香る。いつもとは興奮の深さが違うのか、淫臭に陶然となる。

「んっ……ここ……ザラザラしてる」

処女膜のすぐ奥、膣口数センチのお腹側の襞が妙にザラザラしている、そこを撫ぜるとクリトリスに負けず劣らずな甘い刺激が走る。

「あっ……あぁぁんっ！　ここ凄い」

そこはGスポットという性感帯だ。ツブツブザラザラの一粒一粒がまるで官能のセンサーのようで、指でこすったり伸ばしたりすると、痺れるような、なんとも心地よい感触がする。

「あはぁ……中も気持ち良いんだ」

くちゃくちゃぐちゃぐちゃとぬかるんだ姫鳴りが響く、十代や二十代の娘より膣が熟成していて、異物に対して粘りつくせいだ。

処女膜もこれ以上広げようとしなければ痛みは少なく、中指一本だったが膣内の快感を楽しむことができた。

「あっ！　あぁぁぁ……！　あつっくぅ……美琴感じちゃう！」

弘樹のことを思い、今まで禁欲に尽くしてきた美琴の女としての欲望が弾ける。二十代のと

きだってホントは凄くエッチしたかったのだ。
その弘樹も十八歳。機は熟した、弘樹がエッチを拒む可能性も頭によぎりはしたが、きっと彼なら美琴の想いに応えてくれる。
「弘君！　弘君っ！　あぁっ弘君っ！」
夢中でGスポットを擦り上げると、急激に尿意を催した。
「あっ！　いけない」
おしっこをしたいのだが指が止まらない。我慢しようと下腹に力を入れると反発するように尿意は高まった。
「あっ！　ああっ！　やんっ！　いっ！　いくっ！」
なんとか失禁する前に絶頂に至った。四肢がピンと張りクリトリスオナニーでおなじみの、所謂すっごい気持ち良い瞬間が訪れた。
「んっ！　くっ！　くうぅぅ！」
じっくりと快感を味わってから、のろのろと美琴はベッドから起き上がった。ふらつく足をそれでもなんとか前に進めてトイレを目指す。
やっとのことでトイレにたどり着く頃には膀胱がパンパンに張り、失禁寸前だった。
洋式の便座に座ってちょろりと尿を出した時、美琴は驚いた。
その放尿の甘美たるや、まるでオナニーを再開したかのような気持ち良さだ。実は美琴の膀

胱に溜まっていたのはGスポット刺激による潮だったのだ。
潮を便器に垂れ流しながら、美琴は何度も小さな絶頂を極めた。
再び手が胸を揉み始める。潮吹きをしながらオナニーを再開してしまった。
「嫌だっ！　なんなの？　身体がどんどんエッチになってるみたい」
先ほどGスポットでイッたせいかそこまで膣は疼かなかった。しかし子宮はキュンキュンと疼き、また身体が快感を求めた。
今度はクリトリスを少し乱暴に転がす。普段は包茎なクリトリスがびっくりするくらい大きくなって自己主張をしていた。
「あんっ！　あぁぁぁんっ！　あああんっ」
いつもはキリリとした美貌をたたえる顔はだらしないアへ顔を晒して、よだれまで垂らしてしまっている。
秘部はもうぐっしょりと濡れそぼり、蒸れた股間から香る処女臭はもはや悪臭寸前であった。
卵巣が張ったような感覚はいよいよ強くなり、強烈に子種を求める子宮が痛いほど疼きしこった。
絶対に弘樹を問い詰めてその童貞を貰うんだと美琴は強く思った。
美琴の性格的にそこまで破廉恥な行為に走るような娘ではなかった。しかし弘樹の部屋にあるパンティを見たとき、美琴の中で何かがプッツリと切れてしまった。それは教師としての姉

としての節度ある禁欲であったり、子宮の奥底で煮えたぎる三十路処女の性欲でもあった。
クリトリスを転がす右手に徐々に力がこもってくる。潮とは違うヌメリ気のある粘液が滴ってくる。次いで膣からは白く濁った本気汁までトロトロと垂れてきた。
その時ぷぷぅと小さな音が鳴る。感じすぎて緩んだ股間の後ろからガス漏れを起こしていた。
「んっ……んんっ……嫌だ……おなら」
意識してアナルを締めると、今まで感じたことのない甘美な快感が背筋を昇った。
膣イキに骨盤底筋が緩んでしまったのか、力を入れているにも関わらず、ブリブリと音を立てて放屁をしてしまう。たちまちトイレに香る有機臭。その匂いさえ気品があるのだから乙女のお腹の中はミステリーだ。
「あぁぁぁ……うんっ……らめぇ」
ぐるぐるとお腹が鳴り始め、大腸からチョコレート色の塊が進んでくる。それさえ甘美な刺激として感じてしまう美琴。
アナルを締めるのだが、そのたびに排泄器官で感じてしまう。
額にじっとりと汗をかく、体中からなにやら液だの汁だのを分泌して、口の中はカラカラで、快感のたびに嗚咽を上げる喉も水分を欲して蠢いた。
このまま全てを出し切りたい、美琴は思った。
今まで感じたことの無い様な快感に翻弄されているが、このオナニーはまだ前菜でしかない

ことをこの後美琴は知ることになる。
クリトリスを乱暴に転がして、放屁を繰り返しながら、美琴は昇り詰めていった。
「イクのっ！　イッちゃう！　らめぇぇぇっ！　あっ！　イッくぅぅぅぅんっ」
膀胱に残った潮を噴射すると同時に、アナルから勢いよく大便を放出する。
膣、アナル、子宮、卵巣、全てが気持ちいい。
「見てぇ……弘君……美琴はこんなにエッチなんです」
便座に座りながら、美琴は荒い呼吸を繰り返した。

あとがき

初めましてのかた、よろしく。いつもの皆さんお待たせしました。

ぶるずあい新作官能小説『三十路処女アネカノ女教師妊娠出産』頒布開始です。

本来なら完全無料とするところだったのですが、昨今の広告不況で泣く泣く有料頒布としました。

本来無料で稼げるならその方がコンテンツも長生きするんですが、最近の状態ですと製作費を回収するまで数年かかってしまいます。

ドラブクエストなんかはほぼ完全無料にも関わらず、三カ月ほどで製作費をペイしたんですが、もうそんな作品が出てくるのか……

まあ暗い話はこの辺で、それにしても小説です。エッチシーンはねっちりと書きました。

完全版では破瓜ありのマ〇コガバガバありのアナルありのボテバラエッチありの出産ありです。

シーンごとに挿絵も付いておりまして、藍川ナンデスさんの可愛エッチなイラストが見れます。

よろしかったらぜひ完全版を読んでみてください。

お金に余裕ができたら、また新作を創りますのでよろしくお願いいたします。

そして例のごとく宣伝です。

サークルぶるずあいではエッチなノベル作品を無料でいくつも公開しております。
サークルホームページでは体験版も含め二十以上もの作品を読むことができます。
よろしかったらぜひサークルホームページへ遊びに来てください。
サイトＵＲＬは奥付けに書いてあります。ダイレクトリンクだとなぜか飛べない謎仕様ですが。
同人サークルぶるずあいで検索すれば、たぶん、きっと一発ヒットしますので、よろしくお願いします。

三十路処女アネカノ女教師妊娠出産

２０２０年　１月２９日　初版

奥　付

発行　同人サークルぶるずあい

著者　　弾
URL　　http://bulls-ai.just-size.net/
E-Mail　writer@sample.org

イラスト 藍川ナンデス
URL　　https://www.pixiv.net/users/38844918
E-Mail　illustrator@sample.org

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
(http://tokimi.sylphid.jp/)